



續草庵集蒙求談解五

雜射
連歛



續草菴和歌集蒙求諺解卷第五

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

短哥

雜躰

短歌

八雲御抄才一云短哥

或稱長哥。或稱子細多之。後唐古言抄。巨細の。何も有謂。只所詮。在

奇短。各名。の各なり。

初四句の半の言は横し。七文字に。し。つ。ふ。を。又文字して。それより。は。七文字。五文字を。つ。ら。も。ん。よ。は。を。して。作也。い。川。の。又。七。く。く。川。た。く。首。尾。の。身。し。て。中。し。七。五。句。多。有。也。長。短。の。多。く。し。ま。り。守。能。そ。れ。も。は。よ。さ。て。長。さ。も。ん。ざ。り。す。れ。い。も。く。く。ん。さ。し。作。を。

一云抑稱長方短方事。互。或。説。漢。成。并。孫。攷。式。し。ん。以。之。稱。長。方。表。撰。式。并。新。撰。體。體。し。ん。以。之。稱。短。方。并。普。通。奇。三。十。一。字。或。又。謂。長。方。万。葉。又。以。三。十。一。字。謂。短。哥。歌。云。東。野。別。云。

續草菴和歌集蒙求諺解卷第五

長弁は。その枕詞のありともすくなく。又うつくしく。肝公する事なく。理のさしあがりて。いひの人か。さう。志か。て枕詞よて。いひねとも。詞をか。うつくし。又。又。い。と。く。から。な。ま。う。く。詞。を。を。以。て。い。ひ。の。人。か。さ。う。も。函。よ。え。ん。あ。る。や。う。よ。ゆ。う。一。言。念。の。福。も。は。か。ま。て。い。言。念。よ。い。ぞ。く。函。玄。よ。い。つ。て。つ。し。さ。れ。い。ひ。新。恒。停。務。う。長。弁。を。可。方。年。之。也。二。首。を。所。て。つ。され。い。ひ。一。次。よ。短。弁。と。題。号。よ。わ。く。事。を。意。よ。い。幾。意。も。長。弁。と。可。家。短。弁。短。弁。の。事。千。載。集。の。や。つ。れ。と。す。れ。く。事。の。げ。も。ま。て。い。ま。今。よ。て。と。て。短。弁。と。か。さ。て。い。ひ。祝。摸。よ。て。い。か。さ。ね。て。い。短。弁。と。事。事。を。い。も。れ。な。し。万。葉。集。の。次。よ。え。う。く。ひ。く。可。一。字。の。弁。を。告。い。て。い。ひ。い。こ。そ。か。の。集。の。短。弁。の。弁。の。た。り。り。く。

い。く。それ。より。後。の。集。れ。短。弁。ひ。と。く。は。長。弁。を。短。弁。と。い。ふ。や。う。は。な。り。い。て。い。ま。う。く。あ。り。く。す。か。こ。こ。ら。う。く。お。い。し。ら。さ。う。く。一。の。大。事。と。て。い。云。詞。林。采。葉。の。一。委。一。和。弁。色。葉。の。委。記。之。難。辨。い。ま。し。つ。の。件。也。短。弁。長。弁。お。名。折。句。旋。返。弁。混。中。弁。廻。又。弁。誹。諧。連。弁。の。さ。ま。く。の。新。ま。ど。り。を。い。ひ。降。去。宗。れ。て。海。を。も。り。か。か。う。い。は。長。弁。倍。小。報。恩。も。厚。也。湛。澄。和。尚。の。信。一。書。を。い。て。委。一。け。ま。は。今。別。よ。信。す。ら。も。不。及。れ。書。を。も。り。く。一。あ。さ。日。を。う。き。世。れ。雲。の。つ。で。物。く。山。乃。大。く。縁。を。て。い。ま。り。鶴。け。い。や。の。よ。も。れ。月。ま。ま。が。ら。れ。よ。い。ろ。く。い。ろ。く。い。ろ。く。あ。ま。り。久。迷。ひ。れ。里。を。

とうされて ほとまも我も 海でてもさ かつらいつれを
 ちうぬまづ をあつるる身は せうりくろ 何をさうらに
 うまふじさ んりし海り むらさねの 雲れじう人を
 まらえつて うをわいりて いしけりめ 一人有る勢よ
 さうのまて 寸ぶに浮世の せふ然こて 風どるまを
 ちうけるが 月のこりなき せむしとも ちんざいふん
 ほどやあうん

と成さねな人。海にうた舟。二子首を。舟合ありて
 判をこいゆーを。志ばーけりーゆーよ。そんこ
 ぐりゆーあがうー

雲井海乃 ちうけさ程の あひとの 山ゆらさまも
 ちう終ぬよ
 け五句の田舎人の ちう終ぬよ。ちうらうく事をしていり。雲の
 け五句の田舎人の ちう終ぬよ。ちうらうく事をしていり。雲の

空の依也。空をされば。たのう。ちう終ぬよ。ちうらうく事をしていり。雲の
 とりり 雲の依のちうけさ程の あひとの 山ゆらさまも
 ちうてつけん 後人ふか 撰新こ 是れれ山の枕詞也。ナ来世はよけふ
 のりめ。若原よてちうよ。若原を川のけたれ。山よてち
 ーゆーよ云。又。ちうよ。ちうの足をしていりてのちう。ゆーけこ
 流先達の流也。たもちうー。されとも。適尚の位とるちう
 猶口換あり。舟のんちうらう。ちうの山をいくんよ。ちうゆー
 とちうらわね。ちうよ。ちう也

これちそのねる。 ちう月の ちうもまら敷を ちう人けく
 ちやれふこの ちうゆーり ちうせくてのち ちうらう
 け八句は。年月をちうて。ちう守。ちうらう。ちう事。ちう云。
 ちうよ。ちうらう。ちうよ。ちう也。 ちうらう。ちうよ。ちうらう。ちうよ。
 ちうのちうは。ちうよ。ちうらう。ちうよ。ちうらう。ちうよ。ちうらう。ちうよ。

凡れ玉札の蘓武が故事として新よ出て来り。はなごの
かれ文をえりて。見るうけり。このをさあなるといふ
こと。小笠原よあまの白雲のなまこあななくおがゆりと
云つ。おがゆりていおがえりて也。おひてとさ。同一
あふこといふのをばりり。おもほらしては。さうのたう
名ゆん。伊お候の神よ先落ぬ。いふれ。候也。をさ
あるさうど。これいふ人。候の先を。ぬる也。いふも
か。こまのをさあななく人。相産巻
まけり。凡の。夕づく夜。おぼつるあさも。これそめて
か。成同一。丹せれ河。ふとかよせも。これりりり
文をえりて。いふれ。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜
いふのり。さうて。さうて。いふれ。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜
の夕月。おがゆり。あさも。これりり。春されとさ

一いつく。凡れ夕月夜。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
くれ。をさあななく。二凡の浦の。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
ふの。四句の。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
こ。詞をか。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
もある。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
かよせの。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
い。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
も。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
丹せ川。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
こ。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
か。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
文を。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。
み。おがゆり。あさも。これりり。夕月夜。おがゆり。

續草庵彦五

四 吉多 布敷 大和也

吉多 難波つの一りあり くれぶたうで 寸ぶゆま
 去りまにそしり かりまけを けむむとぞ 寺門ぶか
 てもハそれれ也 物をさうて云河也 抑しりいそとをそ
 ぬて云河也 難波付ハ秋の事といり け篇孰 け寛観
 僧如まき下は物より 秋合のすあをい我 自方の所
 の苦悪をさへえ 分別せ守して 日月さこい 人の所
 の苦悪をさへえ 判の物さく かつん事ハ何をたす
 志りしり事しちるれん ぬるし 也 芦をさうしり
 も云敷也 難波は 芦をよそるれ也 ちるまの 師摩浦 播
 磨國也 ちちぞめらそ 藍をそ 物をさうしり 西のれハ 勝負
 せせしりり 例ハ ありあうぬ 弟をれせよす ばな
 ほとんの事ハ けんてぞく 久しき 大和言資 川とせめて ち
 字玉 辨止

さゆのいりまらるあすまよそ けりかりよりぞゆ 徒人 金下
 たつぎハたす也 何をぬのたつぎもあうぬ 山中におぼわ
 なくもよぶとま 古春 上
 けりるりまられ いちみけ くれむし かりてん
 いしもかりそ ありたれん
 いかみんしん けとりの後也 いかみけ いかしりけり け
 所たれれよやどをいさみ けのいさしりよとみをを
 りや 終室 松別 奇合れかりまけハ たつぎをなれども いやといん
 もかありてか けけりも也 けけりも けけりも 世話のいさ
 ちさしとん也 いしもかりとんをさあやうなん 桐壺 春
 勅をれいしもかりとん 常の若りしり けりいさるん 下
 賢のちのらん又別也 あくハおそれおほさすしりらん
 けいひふらる 五下らんの あさたんよ ちりせけ

事詞ハ替も多。心ハ末也云。換ずるに詞林采葉よ
 赤一く出せり。色葉集云。龍哥よそくする例の字。
 反音と云也。及と云訓をば。ならふ。そむくと云也。
 龍哥をすて。あや月をよそくすれど。そむく
 とはいひなりよと云也。古今序より。例世一字の字
 を反方と云。えと云。け反。必。長。秋。の。う。け。有
 事也。か。く。一。ま。い。長。秋。の。ん。を。引。入。して。一。首。一。詞。々
 して。し。小。後。也。後。文。の。偈。の。ご。く。なる。後。也。
 三。月。の。あ。は。あ。よ。と。さ。り。に。お。わ。く。と。さ。り。そ。老。よ。り。の
 いく。に。て。志。だ。一。ま。れ。ん。今。に。あ。は。あ。よ。あ。り。と。そ
 す。れ。れ。を。今。中。で。い。く。る。ん。と。さ。り。今。に。あ。は。あ。り。と。そ
 と。さ。り。に。も。と。や。ま。の。老。と。成。れ。を。お。わ。か。り。と。也
 物名

八雲。直。物。名。是。ハ。わ。り。い。也。物。の。名。を。か。く。して。よ
 む。奇。也。云。秋。の。意。も。さ。り。何。と。も。物。の。名。を。た。ら。入
 て。と。小。事。を。し。也。是。代。の。ま。れ。も。の。ま。れ。し。ま。し。て
 古今以下の撰集よ入り。申。古。以。来。さ。り。と。あ。り。の
 ま。ま。
 民。神。の。家。ま。し。め。れ。ま。し。よ。と。ゆ。り。世。を。よ。ま。れ。れ。り。か。さ
 れ。ま。し。り。

思ふよとくよわらねむすり衣むかひはるは思礼舞
 かさねすづりいづく重もかさねする祝箱也。さ。祝。守。い。ね。ね
 事也。一。説。さ。い。か。の。後。小。也。す。り。と。ね。ね。後。也。と。ぬ。ら。と。云
 さ。も。同。し。玉。ら。げ。三。室。戸。山。の。さ。ね。ら。う。と。ぬ。す。は。つ。あ。ま
 ありとんす。大。織。冠。後。お。ぐ。た。れ。山。の。若。う。ね。か。り。と。ぬ。す。と。ぬ。ら。と。云
 ぬらこよの月のさやけさ。古。縁。内。衣。後。む。さ。り。と。ぬ。ら。と。云。と。ぬ。ら。と。云。
 古。縁。

陰もあつたすやせよのやうにさあのかつていふに意備五 雅回
 春日形乃あまのすり夜母のいづれあつていふや作也
 思をこつちとていづ夜すこいづねすひとつむすい
 本にさひかへ也いづのあひ字よりいづくかさねすりあ
 すり夜むすりいづとほくくい夜よむね肩あつていづ
 むねをむすりいづ同い事也むねをいづむかひもすの歌
 つか胸の字也

内子大納言家にてちやほよ

ぼよいがん也盆也人をにともし也盆をこつにえん蘭をこらよ

寓をえたと秋あよやりいづていづ類也茶盆也

秋凡れ吹あけりやほいづづあつたのよと秋凡れをいづ人

秋凡の吹あけり月より久方れ天の河東にたぬ目いづ

吹あけりも助字也吹し也秋凡の吹ていづ秋凡れにいづ

よ彦をいづて田をいづ也布道大和玉也大丸所いづとあつた

田のいづいづすりいづいづいづいづいづいづいづいづいづ

うふそく

蠟燭也

月いづの山の名山乃松の凡れよそつたえまあつた

月のあつた山松凡のともいづ人雪のたゆら也

まろしあつた

立幕也たてまくら村中人のむくひなるたてまろしにひまもなまろ

あまろしついでいづいづいづいづいづいづいづいづいづ

たてまろしあつたついでいづのうにさひてまてほろひいづいづ

みの様よ有ををいづいづいづいづいづいづいづいづいづ

とろしとえま白まよあつたいづいづいづいづいづいづいづいづ

いづいづいづいづいづいづいづいづいづいづいづいづいづ

上に志しうみをつりて。舟つあがるやうに志するを云車。
しししとてみ。人の志しうみはうりあがるを云車。
名ぬる也。板敷ともあり。外人の所ありまじに
るやうなるを云。もみよあつてみる。後云
申いたがめあつた板敷もみよすがはわけて年れぬ
人全ま下

い川のりめと云さかへん我をよもつてこゝとや一人のり
我をはるてドと云う一人のりれまた云云さうの事也

夕暮れつこうすをさうに海なれてふのこり、
しにさいしてす。物もわけらる小葉をたは

小葉をたは

らりぞりぞれまらういかにりあつてはるを云ぬか

物志の弁也。はうしよと云ふありとも也。久しくしひこぬ也
さあらしもか。そよよあつてさうね事いあま。し
と。まも物。は。人のか。し。な。は。し。ん。を
し。ま。ま。あ。ぬ。也。と云。は。也。は。こ。の。り。な。な。し。
ゆ。ら。ら。を。ま。し。と。云。ま。ま。あ。つ。し。也

鉋子

ひさしと云ふ

ありさうでうししと云ふみゆる。鉋れよまかえ。し。あ。ひ。さ。る。様
生。の。浦。よ。か。え。さ。し。お。ひ。ひ。を。り。梨。の。か。を。し。な。す。も
ねてか。ら。ん。片。枝。の。さ。し。お。て。物。を。お。り。や。う。に。よ
こ。に。た。れ。う。也。石。を。り。の。鉋。を。り。外。様。花。を。り。し。え
ん。ぬ。人。の。ま。あ。春。け。前。より。さ。ひ。け。け。り。か。し。の。よ。に
横。た。り。う。り。様。を。あ。や。う。さ。な。る。也。り。さ。う。で。う。り

續草庵語解 五

〇廿三

と見たり也

ひびは すすり

火櫃 火を入りお。火桶の類也。ほ少細云栴双紙

火れこさぬ火おけ。すひのとも炭取のほ少細云炭

櫃と云。同一物也

箱むとひむらうる色ゆく回つるに苦ぞうりすみしうぬり

ひつり。刈たう回し。ひとた人のを也。稽類篇云木野生日稽字

景日音品木不因播種而自生。かゆり回しあつひつりの不

よいでぬいせを今さうに秋もてぬり。古秋。そのんすまゑし下

まきうり

村あれおほしきうり走りさした。けはなやあきり

ぬまより田菘のほよりゆけとたよはかぬぬ物そ有る。古秋

田菘の菘とりよぬ。あよやまをわんと也。田菘移別也

同家より久安百首影をニリよすれ

とれ。わつさけ

花菘花を入りの也。關伽坏。關伽の水の梵語也。

坏。高坏の類。土り。菓子盆れ中。次ゆらり。

磬 樂器也

別路いながらこけさるらうきれ君々侍へつらきん

別。のり残るるん曉い。君々面敷のえれり也

三衣 座具す

何れ僧の具也

らびりさたえやい志れんま露りかぬいまるは袖をあつさ

このうすか。さよとやりげくいつり。盆をりこさ

才影也。えやい志んい。え志のむり也。まろ。不意。か

らごかり。まねさくねい。さびりさふえろく志のびど

の増て。つらむ。母はを。あらくら。母はをて
一人がき。いふ。母人のあ。川を越。さ。ぶ。の。さ。り。か
事。も。わ。り。も。う。事。也。

其名ナ

わ。て。う。ま。い。く。た。げ。う。あ。り。あ。け。う。を。あ。り。う。さ。れ
わ。て。う。た。い。蟲。蝶。雪。に。う。げ。う。人。蛛。蜻。蜓。さ。り。明。は。蟻
凡。身。の。い。く。蚊。蟬。衣。魚。降。ふ。さ。の。み。ら。蝦。蟄。蚤
女。の。ま。て。憂。い。在。明。の。月。れ。中。ん。げ。う。ん。母。を。身
ぬ。入。ら。降。ふ。さ。の。み。ら。と。あ。る。や。と。い。い。て。創。を。志
と。う。奇。也。ま。て。う。い。う。け。う。た。れ。も。ゆ。う。何。の。う。た。ゆ
ま。て。の。上。乃。う。ま。事。の。こ。ん。く。と。い。つ。也。

民部の家

部。う。う。か。う。風。と。み。ら。の。れ。た。く。い。男。け。い。白。河。の。宮

う。う。う。風。も。み。ら。の。れ。雁。雁。の。葉。か。り。お。う。う。あ。り
け。ら。風。ま。て。は。あ。ら。う。の。め。も。奥。列。の。わ。い。い。や。う。風。の。身
う。の。う。う。白。川。の。國。と。さ。せ。あ。れ。也。白。川。の。奥。列。也
橋。之。義。事。お。つ。う。り。ゆ。う。か。と。み。は。う。り。ゆ
は。い。う。み。

う。う。か。み。あ。れ。人。を。ま。ほ。れ。妻。の。國。よ。る。ん。づ。や。り
唐。里。お。う。う。う。事。也。ま。て。う。う。う。は。た。く。様。ん。う
う。列。人。を。け。ら。く。ま。ほ。く。身。の。妻。の。實。う。あ。か
う。ん。る。い。を。ま。ま。や。う。う。う。り。ゆ。也。

在

ま。う。ち。や。う。い。お。は。い。う。ま。の。い。ま。さ。あ。れ。友。さ。う。い
ま。う。ち。や。い。ま。ん。や。え。ま。る。ゆ。い。を。ま。け。う。也。
そ。ま。い。の。ま。い。ゆ。う。は。ら。う。い。て。富。の。用。事。う。て。

ちけわらう屋ごわあざらふけけが枯風さびし月とらやをさ
 くれいの毎の末の又また。むらにみさの。さすねをくちり
 ちけわらうの。秋のまらり也。おねり。一ツ有かえまの
 大方哉。成也。疑。くぬあとも有。此奇難なる人。
 引あつら。野のねと。移下。こく神。月。りる。ほま。此里
降信六百 引あつら。屋の中。りり。も。おま。く。浅ら。が。月
番奇合 引あつら。屋の中。りり。も。おま。く。浅ら。が。月
伏見屋新 矢田。越。前。也。浅。茅。を。よ。み
お格秋 有。り。り。矢。田。を。よ。み。浅。茅。を。付。あ。ら。ら。と。穴。を。乃。浅
人丸形 雪。さ。じ。く。ぞ。あ。ら。ら。一。首。の。お。は。は。え。え。ら。り。秋。の
古冬 更。さ。ら。ゆ。風。と。さ。げ。く。月。と。さ。や。ふ。浅。也。は。何。が。母
 矢。田。を。よ。み。の。結。り。の。う。さ。わ。ら。ら。く。
 ち。し。ま。ら。く。

豊鴻磯。梧。列。也。く。ら。ら。く。ん。心。の。さ。し。ま。也。ち。し。ま。り。
 わ。ら。ゆ。く。く。と。り。の。也。浦。く。と。て。より。り。別。後。を。を。烟。後
 ぬ。く。ち。か。が。は。の。う。さ。ら。く。く。と。り。の。か。ら。ら。く。か。古。衣。小
 無。く。と。ち。か。が。は。の。う。さ。ら。く。く。と。り。の。か。ら。ら。く。か。古。衣。小
徒乞之 山。里。これ。い。草。の。と。う。う。や。と。ん。ら。り
拾雅九 お。あ。い。は。し。
 神。い。の。れ。だ。流。れ。あ。ま。さ。く。ま。さ。さ。て。か。と。ぬ。袂。を。と。り。人。り。は。し
 人。を。神。い。の。れ。の。あ。れ。ん。袖。の。流。れ。と。ち。わ。れ。て。か。と。ぬ。袂。を。と。り
 ち。し。ま。り。の。あ。れ。れ。と。と。ぬ。也。
 民。部。の。家。く。く。ち。し。ま。ら。く。ら。り
 ち。し。ま。ら。く。ら。り。神。の。葉。の。お。よ。ま。さ。さ。さ。さ。ら。り
 神。の。葉。を。と。り。の。あ。れ。れ。の。う。さ。ら。く。く。と。り。の。か。ら。ら。く。か。古。衣。小
 入。も。そ。れ。ん。事。の。う。さ。ら。く。く。と。り。の。か。ら。ら。く。か。古。衣。小

一と花のしつたさうと

誹諧

八雲抄云。俳諧奇。是凡のりちるをいつてうわしん。おと
しき。換。ある人なし。公任卿^{ミナト}たもも不知之而通後か
めしをえさるありありをん。入於後拾遺。经信卿云。入
俳諧奇。あく。おと事のしつたさう。彼云く。彼如公任
经信不知。あつるあつる。末代人。非可定。又千載集
あしわ。えさる。さうあり。さう。推。さう。推
し。其の換。ある事。後拾遺。千載集。入。入
奇。の。物。狂。の。る。あ。れ。い。さ。あ。れ。奇。解。不。見。吉。今。或。説
是。孤。知。つ。わ。ん。定。し。は。わ。れ。は。奇。解。不。見。吉。今。或。説
曰。誹諧。奇。換。一。俳諧。二。誹諧。三。俳諧。四。滑稽。五
諧。六。謎。字。七。空。戯。八。鄙。諺。九。狂。言。此。亦。子。細。末。毎

之。色。集。集。云。誹諧。奇。といつらん。利。口。の。奇。共。云。依。あり
口。き。年。説。あり。人。れ。ざ。れ。と。す。ら。ら。ぞ。と。也

これと人のわらうを説く

か。孤。れ。と。い。ひ。風。が。あ。つ。ま。孤。様。む。め。い。あ。つ。と。て。枝。を。お。れ
花。の。ま。の。霞。よ。こ。ち。く。ん。き。ん。も。香。を。さ。ふ。あ。と。か
ま。の。ら。風 ^{宗。上。元。吉} 花。の。香。孤。れ。と。い。ひ。思。え。も。し。さ。う。説。く。も
風。の。人。よ。あ。つ。ま。ぬ。よ。今。い。人。の。人。よ。あ。つ。ま。ぬ。枝。を。お。れ
の。は。つ。さ。よ。也。香。を。ぬ。と。い。ひ。さ。う。説。く。枝。を。お。れ。ハ。入。う
ま。り。り

花まゝいそとてりてらら三月盡よとあり侍

し。う。あ。つ。ま。今。の。花。と。あ。つ。ま。い。と。あ。つ。て。春。を。惜。み。と。れ
今。の。花。は。い。ま。い。ぬ。今。の。花。と。い。ひ。は。あ。つ。ま。い。と。あ。つ。て。人。あ
宿。も。と。り。て。ん ^{伊。物} う。う。と。乃。不。誹。諧。也

いふやうな紙を紙とて引く人もある。紙の種はあつた紙、
わらうとて。七夕あも紙と云ふ也。又わらうと人の紙と云ふ紙
久しく。間紙やま紙也。人の紙乃字也。引の紙とてふ
かま紙は、まてあつた、その紙也。は、すの紙、錦の紙、
て織也

夕下

やうな紙を紙とて引く人もある。紙の種はあつた紙、
わらうとて。七夕あも紙と云ふ也。又わらうと人の紙と云ふ紙
久しく。間紙やま紙也。人の紙乃字也。引の紙とてふ
かま紙は、まてあつた、その紙也。は、すの紙、錦の紙、
て織也

わらうとて。七夕あも紙と云ふ也。又わらうと人の紙と云ふ紙
久しく。間紙やま紙也。人の紙乃字也。引の紙とてふ
かま紙は、まてあつた、その紙也。は、すの紙、錦の紙、
て織也

将捕を

いふやうな紙を紙とて引く人もある。紙の種はあつた紙、
わらうとて。七夕あも紙と云ふ也。又わらうと人の紙と云ふ紙
久しく。間紙やま紙也。人の紙乃字也。引の紙とてふ
かま紙は、まてあつた、その紙也。は、すの紙、錦の紙、
て織也

徳川書言解

かゝあれはさびくもあれ也。神も八福一の将として得た
力も事也。交り得也。認得。終夜身もやまじしと賤乃れ
が縁。ぬをさうの谷乃れ也。冊後等。例。我志はあつて
わくもえそぬれよふよふと。故まをさう。集。さ
ゆたのやうき賤也。ハテ云。このうらぐ人地。藻治事云。薩
雄。ゆす急。うれ事也。うれ上。答也。彈。速。同。薩のまね
くも。ぬ。あ。う。終てらう。げ。な。さ。う。た。の。縁。い。う。ら
く。う。れ。え。ゆ。か。ん。た。也。

子馬

る。ぬ。さ。う。れ。さ。う。さ。ぎ。と。れ。濱。子。馬。四。代。ま。と。れ。を。お。う。つ。ま
た。ぬ。さ。う。ら。お。中。り。ゆ。ま。の。後。正。命。他。志。よ。か。ぬ。ま。さ。い
いの。あ。ぐ。さ。む。後。也。わ。く。え。ま。は。ぬ。ま。く。さ。の。後。子。馬
人。う。い。あ。う。と。ま。う。す。か。う。れ。後。人。不。名。名。草。濱。紀。別。也。

紀三井寺のふ瓜名草と云々。四代までい。天子四代乃
撰集し入る也。新千載集もい。四代目なり。子馬
乃れ法といは。文字の事なり。撰集し。子馬と。い。れ。入。
事也。

水

水。れ。面。よ。う。は。ま。る。新。の。ら。う。さ。は。ま。ま。い。ゆ。め。老。乃。信。れ
周。の。さ。ま。ん。年。も。ゆ。ま。ん。と。り。も。わ。く。ど。ろ。ろ。の。こ。い。わ。い。や
と。い。ふ。ゆ。う。と。古。雜。水。は。新。を。う。つ。ま。は。さ。り。ゆ。ま。ん。ゆ。め
し。う。い。つ。り。む。乃。ら。う。さ。は。ま。わ。れ。う。と。と。人。が。叶。だ。
む。の。ら。う。ふ。を。あ。う。じ。也。

水

契れ。れ。あ。の。河。の。み。く。ふ。と。ぬ。ま。が。ん。て。あ。う。う。し。
舟。く。へ。荆。楚。記。曰。五。月。五。日。屈。原。以。是。日。死。於。汨。羅。

讀書記

武人

人心うらまへしむるにまをたのまどよ
さいつうを宗貞朝は曰

夏よるゆちと縁ぞとまよしける

又天曆

さよふけといまぬ縁さくぬいかり

源朝内侍小太公

ゆえうあふべと人やまのり

これらの上古れ事也。非朝夕。事而次第より多連之。
近代の如は。事也。古は是をせんとする事よりわご
まば。不及口傳故。實。近年こそ。整多事さるの
付之有少。故。又禁制事。及。末代む下存
の事也。菟玖波集。序云。さるあふぬ。まよひ言

けいもや。小部。のりくして。文のゆにさる。秋のさほよ
うさつ。日本武尊の夷のふざれとやうげして。はくね
れ事さげさる。故。あふ。中絶言。家持のさる川の
水。あさうらふをの。業平朝は。さる板の園
ささけをさる。天曆の序。源朝の四つ。みさ
のり。とれ。北野。天祥のあま。清戸。さるゆ。事と
け。を。終。中。は。り。六。の。さ。所。乃。玉。つ。さ。う。た。つ。縁。
あ。れ。下。根。た。く。げ。く。事。に。ち。り。ぬ。さ。り。ゆ。り。さ。れ。い。
代。の。り。ゆ。さ。の。序。門。也。撰。集。さ。る。家。の。り。道。を。え
さ。る。人。也。武。目。を。作。さ。る。久。く。中。の。と。れ。り。て。あ。さ。い
の。お。れ。を。り。さ。る。さ。る。り。さ。る。家。紙。は。師。所。作。竹
林。抄。云。連。秋。は。日本武の。み。さ。る。は。く。どの。さ。る。案
る。ゆ。ま。う。て。さ。る。新。撰。菟。玖。波。集。云。さ。る。ゆ。り。さ。れ。い。

かしのしれなきや帝の万葉集をりてあつて二度
 の執務もこれを使へのをしれしうくく。家か
 先づらも。これをもちあそぶだてしきもあ。業平。
 朝長は。はらうそのさした。まさけ有あ。のうはさで免。
 公任卿の。ふくろがまひつぐ。まふでわあをのこ
 たり。其むらもまて。一首のうた。こへて。よあ
 中したかんしひけら。中はたり。このさ。も。うた
 句は。あ。つ。絲。甲。う。の。う。み。か。さ。さ。の。う。み。ま。し。め
 かりき

子たれそかりのちかやそく後とつよ白よ

雪ここまごまごあよまよまよまよまよ門

龍門。古和也。滝あり。洞とて人まごい。人及。海あり。
 ちんれ門よりまごりあ。か。素。名。案。

ひよも中よるぞそそあれ

とふよりる浦よりうすむあつらうま

此句。菟玖波集よのくひよ中あもとあり。あるは急
 のうちり。う。ひ。い。わ。れ。も。か。の。中。は。は。る。ぞ。そ。の
 ありあり。信よりより。渡路よひよあ。中よか。あ。れ
 るぞ。け。そ。あ。さ。う。り

こぞ。情。こ。ん。ご。ど。わ。れ。ぬ。ら。ま

ねそこそくれれとぞとさい

向川の春れ材を足さるるをばねとそ花のそま
 也。くれ。後。頼。詞。春。ひ。奇。う。そ。付。を。作。と。り。さ。れ。も。あ。ゆ。せ
 は。花。よ。あ。い。う。あ。よ。花。と。付。ら。は。用。付。と。て。嬌。う。是
 想。で。て。花。と。有。あ。ら。ま。林。あ。は。け。し。そ。あ。花。の。咲
 本。を。付。ら。は。う。梅。あ。げ。し。の。花。の。あ。ま。ん。花。と

竹うはあゝ又花を梅を竹うは。口授有年也

かよいらの雪より後もれうのうき
はくうらうらう池まうがざう

此の菟波集雜部に入。上の丹ありくゆりも。今うの
とだ。竹根竹ぶりののまい路うとりをす起。さうを
雪うう見えも

赤のうとをうも雪うう少れ

瀬と瀬もくもきく水ううき

川中何うはねたう飛う川何りの瀬うう
瀬うから古四百今白瀬瀬と竹う。雪ん水
を竹う

山路をちねと好まむもかげ

物に雪をまきううと後れ花う

別もかれはうんはう想ぐん白菊の花より花の花

まきれは伊勢を哺

新枯乃色れ

旧乃高れは菊

より花の花も青なり

友系資隆

いもあううけう

色乃惜さうれ菊より花の花うけうは拾玉不見

花中偏愛菊此花開後更元稹花

古里ううかつ花ううはあまう

まうう落ううううううううう

遼東城門有華表柱忽有一白鶴集柱頭時

有少年拳テイレイ欲射之鶴乃飛徘徊空中而言

曰有鳥々々下令威去家千載今来歸城郭

如故人民非何ハヒカ不学仙塚累々ルイ遂高冲天云云

披神記

うあまうううううううううう

ハ一編して。存のよみまをほして。ほしてそへ家
宿けすみまをと作らまへ母

菟玖波集入。詞去よ。たふ院入道右大臣の
比留侍まゝふ里の存れとみまをほして帰る
とてほしてせう人家宿乃すまをとつみ
をくり侍まれいとわり

たふていふやよとねるまといと里一

くれも用付して。苗也まへつり也。たふとつみまを
けりうりうり一。まのねにすまれつみふくつみまを
形をたうりうり一。夜寝まゝる赤大珠ねつまの。寝まへ
ま也。一夜ねまゝるつりつり。久くつりつりつりつり
どまれ。一夜ねまゝるつりつりつり。寝ままゝるつり
まをほして帰るかとけりつり也

ほねがの神をいづる每人とりよる一
等とまねとれあつこよをけかあつこり

是も母の等まゝ。ほねをほねま也。ほねま。つり
む也。ほねま。母乃やう也。母やうのまも。そゆ
まもまゝまゝまゝ。土佐日記。有。樓船と。前赤
壁賦。杜律。字ふつりつり

とめまのつりつりも秋まゝまゝ一
風うまゝまのまのつりつりの夕時ぬ

かゝるのこれと拍の二まをまゝまゝまゝまゝ
人六万+も秋まゝまゝまゝ。夕のまゝまゝまゝ
まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

あゝ。ねをまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
うまゝま。ねのあゝまゝまゝまゝまゝまゝ

いづりて唐の外にふるはるるをいふはたはたにけり

花は月もいづりてさきくつるはるる

あまのつらみはさかしの影のあけぼのよ

花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる。朝うねのよが

みやまのよとけり月よ朝うねのとけりていづりて。槿のよのよが

月も曙のよのよとけりていづりてさきくつるはるる。いづりてさきくつるはるる

つらみはさかしの影のあけぼのよ

いづりてさきくつるはるる

ふのくれもみらとともはたはたにけり

晋寶 縮妻。織錦。為廻文詩。以寄。縮。宛轉。循環。

文甚。悽惋。お糸の孫といひ。雁を文をいふにんて

いづりてさきくつるはるる。お糸の孫といひ。雁を文をいふにんて

事也。花をけりていづりてさきくつるはるる。近代婦人

菟奴波集一入

おれどくはむの本をげよ宿いふれ

行を結ぐるといふはたはたにけり

いづりてさきくつるはるる。竹をいふはたはたにけり。同。まをさきくつるはるる

花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる。花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる

花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる。花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる

ふのくれもみらとともはたはたにけり

行を結ぐるといふはたはたにけり

いづりてさきくつるはるる。夕日は海に入るといふはたはたにけり

花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる。花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる

舟帰。杜牧の詩のよ也

いづりてさきくつるはるる

月影をいづりてさきくつるはるる

花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる。花は朝うねをけりていづりてさきくつるはるる

ちり

ゆきまきみをさしれ端うりか結れを

送をきくゆゆへよ月紙かさねるれいづくたくれ
り霞よふのうもろうりてあむ。字也面白

まもれあひごりあうりをさうさ

と紙ふのさでえをいづれ秋り月

茶うの俵の眉間カクム白豪相也。をふに眉マユれ

まば。その向り。月の物影の眉の間りえのさな也
眉のぞくまのよえゆるあしれへうけてく。毎論也

らげれ 抄主 万六

月をこそ枕はごちねうもんが

風うり杉まうさなをれ萩原

菟玖波集へ入けき也其の何がぬ萩う風よ井さぬ

して枕はごちね也。いしくは花さごらん方もさ

つふねしあうまみんく 右主

さく流るまう少と友まきあうさ

ふ水をいふ本れうげをさうらん

岩本はかさを物るれい。けり。友とやう。うら

いふ本れ友とさうてさうらん。岩本のうさ。ん。さ。上

あまをさうか

こ屋うりうの唐まき本のさうらん

は花さうみあうさむお福てさみまいね

明女の雨またくしふれが枝の葉もあうらん

ねくく心付ようり。万。これとさうりさ付也

か免れゆかうり。とさ紙をさうらん

好れしれとてい不登も高し舞

高きは向流のよりのまざりた世さほくすあま。
のよたれが客もさざらす後人不ああまの宮あまの
あまさこそさひいに今ハ漢田は産をほくす。母
さしあまも田取すの事よこ也。あひにさあ
少張付人

好しあう終老も金静らん

冬枯れ志のよりの草も高し色れ
ありのあまはあま。天教のまろりる也
くれゆげむもほよ風吹く
志ぐれもねとささやましく舞

風こりまじいさあまよりのまろりる也
もあま君舞里まろりるをまろりる月の入され

ふをけりあまのね結村をゆりる方乃里は月
元ろりる月にてはらどけろ方れ里は月あてり
る。河女のふらど。何れもまの里をまろりる也

雪ろりるまろりるあまぞれもまろり

教たろりるをまろりてははをろり橋

花のろりるまろりる。雪の晴向て入る。をそ橋をほ
せれ張りるやまろり

こまろりるぞあま志あまろりるま

あまろりるぞあまろりるりりりり

あまろりるまろりるみざりやろりるをまろりるゆ
志あまの浦信冬これれろりる竹也

うろりるあまろりるやまろりる

かろりるあまろりるろりるあまろりる

月づげのうらうら水くく花らうて
月を氷よんてそ花をこきたんてそ也
ゆりもそそねもそ世こそう移るれ
うらうらばを雪くくやねまじ実の竹
せぬううすてそとこつう竹の書をけしん花ら
ゆん竹の節がわらも也。節とよとこつう
とんね身までとそいわりたり
かづれごととむをむづうろ宿かう舞
引いわはむづうの宿は福もあそんり来物も

神をくはれも伊物とほの身ふびくれがくけう。思ふ
ひづうの宿。伊勢物語の如也
とみられたまふも申於川上
雪の如くくやゆづりれ村いづれ
羨政は集冬部へ入川このゆづくの村いそまじに
常也しがふとここ也。吹黄こ女
村を付。河敷い。白雪狐付たり
霧のうらうらとれとごうのうらうて
秋より雪れはもねねし表根
ふのすう。例。けう花咲あつ河いかづうさむふのと
くたかろ白雲。春上。吹いがねいふのうらうと埋ま
て雪のうらうらうふ白雲。暇後。夫本。ふろ後狐うらう
さし。雪れく人母林うらうと付たり

續草花言解
四十一

表このるぬれわれしるを。又関若川をて袖をぬきも也。
英法中のふり実若川よみ合きりり

行よりねりりの秋風

笛れもぬまらやほしのちぶりて

待くらは。待えるも也。結くらり物の若紅作ら

笛。ねい琴の若が。秋風はぬる也。若しも

こつねやむむ日ことくれぬま

そまれるるふり月の出るり

こつねら也。古の若し有瀬のこのこ母のふり紅

葉があらむむたぬける月れみぬと

より山の天の川流るる若しや月のはぬれ

こつれぬるる月の流るるる物のふり

月の流るるる風をたよるる物のふり

宗室教玉
之百首

くあみらるることふりぬき

柳の花は鳥乃ぬきまりて

雞寒上樹鴨寒下水傳燈若しからは鷄り

中りてあるるちり

まもち後く鏡れけとありるり

柳をららるる花乃ちりるる

梅の花はもらてれ我宿の柳眉ふ井のゆめも一万年分は

つくもの鏡とかる水の教るるをやるるとつと上美蓉如如

面柳如眉長恨柳の眉ふみみ花の下水と後とり

雪ことよはりちりちりちり

あくはらるる月のこれど新まさり

葉の明く花の力の新はちりて雪が新れ力乃

えと成ちりる又月の明さハ新らるる雪は明く

ひかり青床アヲ又屋わろさむ
車をど返してあつひ人ともごと

人もこぬゆひひかりさむ人のわろぬをひひ車といふ
ひかりさ車の轆ワケ也。床の車れ床也。人をよひひ車
をやつひに車をうけて人のこぬ也

大殿の清き秋よいさぎよ青水と思やのどく
くしてといふるよ

河原れ月づもの中よとむ

蜀志曰先主曰孤之有孔明如魚之有水。詩小雅
魚藻章云魚在々藻魚藻々也。志云了た事よさ
ゆ月づもの中にとむい魚乃藻の中よ信やる
と也。藻をばきよた事よさ也
ほふさごをりよとくちさうをひ

あけの夜に霜を好り霜

雄剣ユウケン在腰ウラハ抜則秋霜三尺将軍月夜ツキヨうにさる也

是も秋のちるよ剣ハ

霜りまれサ芦アサも小舟コボネこまかて

ほろろあけの夜ちるよ

兼手付也

何よさうりてこりどぬん

ぬれ夜の交りぬはとあつものを

雨よさくさうりすあつものを。と夜ハ何事乎よこ

つてこりぬる也

かさぎれほむされおの白夜よ

あけの夜もあつひをこす

静のよさうりつれをくおの白さをんれいおをさ

よけりの新也。静のうとつたり竹さう。所れつゝか
ふを。うにんてり。是も静のうとつたり。ほけ也

そまよれとまりうか。見えありけを

里れんをまゝ思慕り見ゆと

引く鏡そこちり影しじういぬてんり何とてま

らた翁よあふくらす色拾遺記 奇れ詞よりてなり。

茶台の江列。鏡乃宿也

廿日乃月うをそくまりわら

嘆らふの程そそけきうと草

嘆しよりちりまをそくし程は花のゆとて此白

るにたり まよ 花開花落二十日。一城之人皆若狂

牡丹芳
白氏四

ふ縁乃衣を花はまかして

あまにらんれ名ぶ新し草

様麻とつあり。うらつれ衣の様麻をそくらふ

夕れも花のまいたた也。様麻乃およれ下草と

げとてあうで別し花の名なれ待賢門院
安徳公御言

志ぶしづくに身をわくさまう

花ぢうりさわれぬふまわくもまり

あふふとむきつて人のくらゆとぞあう様のとがけい

あけり 西行 陰者少人の来をいしあう

たのうよめをちやうりちくる家

こまかこのさやのうらうら秋まきよ

舞は物降とまきあり。右方の舞也。舞をたかま

ぬ也。舞は舞わゆる人。あふり依保しついでなり。

あふり依保しついでなり

久保志修のよきうきりつた

わらわどもこまらぬ世をくらかふさ

けり菟玖波集詠諧部に入。春の序かときこひし

さうのわれわれはとんととて

ふ青吹く歩はち修をくらりなり

つらん二清内院 洲らん月吹風は秋をけとあそん

の衣打也少集

うて修なる青をかさけり風

ほがよれいそみでちあふて

萩の葉にすく系をいさうたは七夕などたし船い

川らん徳元任 詞北休 くらんもさこ我宿り萩のくふ系川

うけて蛛ふらまふ師崎堀川 百有抄林 社の向らんあうりよつたう

ひの蛛れんくその萩うよ風清崇遠 舟名若

笛よあひせて琴や引所舞

草薺のうらなれ夕中春の風

ま刈乃笛也春風を琴にまく也云々

文をけいつうたよりごみあ

長くだよみくてもんをくらみんや

まを春のちるためさう。文のたよりごんさけさび。ゆち

をそものひりり也

ほくくやあいつら程乃月そ

まはぐみハちぐもくそいさぬる

こせふのほくくほくまきつらくらんはくちまこせ

の春舟を一万巨勢大和也。莊子曰。有。大椿者以八

千歳為春以八千歳為秋。八子歳とつゞきんそいあつあつはやく程
しるふさ所とそと也。ほろくくいはくくや日一。熟也。
松壽千年終是朽。槿花一日自為榮。白氏明
依槿
伊勢れくく終終しゆとた。日終の便。ほく
のまうりのつむぎよこそまけとすけしよ

屋まうりのこころあつあついつつ河
つしまふふとそ。有る也。水伊勢。尾法との境也。伊勢
よ射るれ有とつふゆ。と後の内。和泉れ有と射
はけ也。いつつ川。本いつつ川也。日本紀よ。今日本
津川也

とそとそあつあつおめく乃お経いんくたそ
とそとそあつあつおめく乃お経いんくたそ
とそとそあつあつおめく乃お経いんくたそ

清に杖を倚り風来の面白き也

此一帖、と校合落字亦か書之者也

明應二年三月廿一日

大和言法印 在判

此集者以竟孝門弟法印竟憲自筆之存
在表書寫者也

5000
15冊

京都一條通烏丸西入町

作者梅月堂宣阿

享保八年八月吉日

書林

京 武村新兵衛

大坂加藤六藏

同 岩崎徳右衛門

同 葛城長兵衛



Handwritten notes and signatures at the bottom left of the page.

